

---

## 研究活動報告

---

### TICAD7 サイドイベント

2019年8月28日(水)から30日(金)にかけて、横浜で第7回アフリカ開発会議(TICAD7)が開催され、筆者はその公式サイドイベントの一つである「アフリカの人口高齢化を見据えて—高齢者ケアの「今」と、大陸を超えて共有すべきケアのあり方—」にモデレーターとして参加した。このサイドイベントは、長崎大学増田研准教授が研究代表者である文科科研プロジェクト「東アフリカにおける未来の人口高齢化を見据えた福祉とケア空間の学際的探究」、東アジア・ASEAN 経済研究センター(ERIA)、公益財団法人 日本国際交流センター(JCIE)、長崎大学の共催で、国立社会保障・人口問題研究所の後援も得て行われたものである。大河原昭夫 JCIE 理事長の開会挨拶、ナタリア・カネム国連人口基金(UNFPA) 事務局長の特別挨拶の後、基調講演としてアワ・マリ・コルセック セネガル国務大臣(元保健大臣)、プラフラ・ミシュラ ヘルプエイジ・インターナショナル アフリカ地域ディレクター、マリキ インドネシア国家開発企画庁人口計画・社会保障局ディレクター、増田研准教授から、アフリカにおける人口高齢化とその課題、アジア、特にインドネシアにおける状況、人類学からみたアフリカ人口高齢化の様相について報告がなされ、パネルディスカッションが行われた。最後は駒澤大佐 東アジア・ASEAN 経済研究センター総長参与により締めくくられた。

アフリカにおいては、高齢者人口の割合は未だ低いものの、総人口の爆発的な増加に伴い、高齢者人口の増加数は大きく、今後20年間に2倍、30年間に3倍に増加すると推計されている。それに応じて医療・介護ケアの需要も爆発的に増加すると見込まれているが、「介護サービス」という概念は未だ十分に共有されておらず、高齢者のケアは家族がするもの、という通念があり、またその通念が、急速に変化する家族形態・世帯構成、また若者の都市部への集中により成り立たなくなっている、というアジア同様の状況が生じ始めている。さらにアフリカ特有の状況もある。例えば、1990年代からアフリカで猛威を振るったエイズにより多くの親世代が死亡し、残された子供をその祖母・祖父が養育するような、skip family も多い。年寄が死ぬのは図書館が燃えてなくなるのと同じである、ということわざが示すように、高齢者は知識を持つ尊敬すべき対象である、とされる一方、黒魔術を使ったと疑われ殺されてしまう高齢者もいる。限られた資源の中で、高齢者と子供の生存競争が生じることもあり、また子を持たなかった高齢者は社会保障が未整備の中、貧困にさらされる。多くの課題自体がまだあまり認識されていないものの、人口高齢化はアフリカにおいても着実に一つのテーマとして取り上げられていくことになるだろう。

今回のサイドイベントは、アジアからアフリカに繋げる、ということから「アジア健康構想(AHWIN)」の一環として行われ、その内容は、アジア健康構想の web サイト <https://www.ahwin.org/posts/dialogue-aging-in-africa-ticad7> に掲載されている。(林 玲子 記)

### 2019年度日本建築学会大会(北陸)

日本建築学会の2019年度の全国大会は、金沢工業大学扇が丘キャンパス(石川県野々市市)を会場として、2019年9月3日(火)~9月6日(金)の4日間に渡って開催された。「次の時代は」という大会メインテーマのもと、建築に関わる多様な部門に分かれて、学術講演や研究協議会、パネルディ

スカッション等において多数の報告・討論が行われた。筆者が参加した建築計画や都市計画部門では、人口減少を前提とした都市の再編・再生に関わる学術講演が多く、とくに、縮小する地域社会に対応したコンパクトシティ化と、持続可能な都市構造への再構築を目指すことを目的とした立地適正化計画に関連する話題が目立った。研究協議会等において、人口減少社会をテーマに掲げたものを以下に記す。

研究協議会（建築計画部門）

「人口縮小社会におけるコミュニティとパブリックの新しいかたち—2030年の地域施設の姿とは」  
研究協議会（縮小社会における都市・建築の在り方検討特別研究）

「2030年の都市・建築・くらし—縮小社会のゆくえと対応策」

パネルディスカッション（農村計画部門）

「少数社会の展望—担い手とその支援のかたち」

今大会の開催にあわせて、開催地との連携による建築やまちづくりに関する講演会、歴史や文化の発信、また、災害復興や環境保全に関連する情報提供など、ひろく社会一般に向けた催しや、子ども向け、学生向けのワークショップなども実施され、いずれも盛会であった。（小山泰代 記）

## SilverAge スリランカ老年学国際会議

スリランカの首都コロンボで開催された SilverAge スリランカ国際老年学国際会議（International Conference on Gerontology and Geriatric Medicine）に参加した。国際的な老年学会議としてはスリランカで初めて開催されたこの会議は、当初は7月25～26日に予定されていたが、4月に開催地近くのキリスト教会やホテルで同時爆発テロが起こったため開催が延長され、最終的に9月12日（木）～13日（金）に執り行われた。延期の影響を受け、スリランカ国外からの参加は大幅に減ったようであるが、それでもスリランカやインドなどの老年学専門家による、興味深い報告が多く行われた。筆者は、「介護従事者の国際比較」と題する報告を行うとともに、スリランカ国連人口基金（UNFPA）が組織した「高齢人口の女性化とその介護への影響」というセッションでパネリストを務めた。

スリランカは現在65歳以上人口割合が11%で、その割合が7%から14%になるのに要する年数は20年間と、日本の24年よりも短く、現在急速に人口高齢化が進行している国である。会議でも、ペラデニア大学付属の教育病院における高齢者ケア・ユニットの取り組みや、認知症患者の生活の質など、多種多様な報告があり、すでに高齢化が大きな課題であり、取り組みが進んでいることが感じられた。会議の内容は <https://silverageconference.com/> に掲載されている。

会議の後、国際的なキリスト教（カトリック）団体が運営している高齢者施設や、スリランカ・ヘルプエイジが運営している高齢者デイケアセンターを訪問した。前者は広大な敷地に広大な建物が建ち、入居者は100人程度で家族と共に住めなくなった高齢者が対象となっており、費用も無料だとのことである。後者は仏教寺院に隣接する施設で、近隣の高齢者が日中集い、近隣の篤志家による寄付で、毎日昼食が提供され、高齢者自身も準備を手伝うなど、参加型の公民館に近いような活動をしていた。これら以外にも多くの高齢者施設が存在しているようであった。

なお、スリランカを訪問した3ヵ月前の2019年6月に、日本とスリランカの間で特定技能に関する協力覚書が作成され、介護分野も対象となっているため、スリランカの海外雇用局（Bureau of Foreign Employment）局長と面談した。介護人材は現在、イスラエル、韓国、中東のいくつかの国、ドイツに送り出すよう交渉中であるが、ヘブライ語、ドイツ語の研修も必要とされており、いまだ送